詩編５２編の黙想（2021 年 7 月 7 日東福岡教会祈祷会奨励松見俊）

力ある者、悪事を誇る者の結末：神の慈しみの勝利

それほど長くないので詩編 52 編を朗読してみよう。この詩の主題を積極的に、神の家にとどまる、あるいは、神の慈しみに依り頼むとしたいが、はやり詩編の出だし、「力ある者よ、なぜおまえは悪事を誇るのか」との嘆きの言葉、あるいは皮肉な対峙が印象的である。信仰者は「力を誇示し、悪事を誇る者」と対面しながら生きるのである。私たちは歴史的、関係的に生きずに、どこか信仰と抽象的に生きていないだろうか？　私たちは対峙すべき敵対者としっかり対峙しているだろうか？「力ある者、悪事を誇る者らの繁栄は一時的で、将来は破滅であり、他方、神の慈しみは「絶えることがない」、御名に望みを置くものは「とこしえに」感謝を捧げうる者であると信じているだろうか。虚しさ、諦めが私たちを支配していないだろうか？「いのち」を育む力は「権力」「富」「嘘・偽り」ではなく、「神の慈しみ」なのである。（メイズ）という言葉に心から「アーメン」と応答したいものである。

１．あなた、力あり、悪事を誇る者！

詩人は、敵対者に「あなた」と呼びかけ、敵対者に向かって告発する。「力ある者よ」（hag･gi b･bō･wr）なぜ、悪を誇るのか！破壊を考案し、あなたの舌は剃刀のように鋭く、欺きを計る。あなたは、善よりも悪を好み、義よりも嘘・偽りを好む。セラ（休止）あなたは、偽りの舌を熱烈に求めて、そのようなあらゆる妄言を好む。このような人が私たちの周囲にいないだろうか？あるいは、外面的穏やかさに誤魔化され、私たちも見ない振りをしていないだろうか？

２．神の判断と行動

悪しき者の力や策略、破壊の行動は、どのように力強く見えても一時的であるが、神はそのような「あなた」を破壊するであろう。神はあなたをあなたの住まう場所（mê･‘ō･hel 幕屋）から取り去り（yah･tə･kā）、引き抜く（wə･yis･sā･ k ā）であろう。未完了過去　継続的にそうするであろう！そして、あなたを生ける者の地から根こそぎにする（Piel 強調の完了形分詞）。

３．信仰者の反応

8 節からは詩の視点が変わる。悪しき者の姿とそれに対抗する神の行動を見て、信仰者（義人）は、一方で、神を畏れる。そして、他方、一時的であり、過ぎ去る悪しき者を笑う。「あの男はここにいる。彼は神を彼の力とせず、彼の諸々の富に信頼し、彼の邪悪に彼自身を委ねていた（力づけていた！）」実に愚かである。

４．神に信頼する者

このような愚かで、悪事を働く者に対して、「わたし」は（wa･‘ă･nî）はオリブの木のように、いつも緑であり、神の家に（留まる）。わたしは神の憐れみに（bə･he･sed）「とこしえからとこしえに」（’ō･w･lām･ w ā･‘ed, forever and ever)信頼する。

わたしはあなたをとこしえに賛美する。なぜならあなたは（それを）して下さったから。何をしたかが言及される、神はして下さった。というのみである。11 節の「そは、汝は既に成したればなり」は「見

ずして信じる」先取的信仰を示している。神が何を下さるかではなく、善きものを下さる「神」に信頼するのである！そして、わたしはあなたのみ名を待つであろう(あなたのみ名に仕えるであろう（wa･‘ă･qaw･weh)。なぜなら、あなたの聖徒たちの前で（ne･ged　hă･ s î･de･ k ā）それは良いことだから。理由の単純明快！　これは良いことだから！　新共同訳は「ハシデカー」を「慈しみに生きる人」と翻訳し、「良い」（tō ･wb, good）を「恵み深い」と翻訳する。青木澄十郎は原典を生かし、「我は永遠に汝に感謝す、そは、汝は既に成したればなり。我は汝の寵者らの前にて汝の名を待望まん、そは、善ければ也」と翻訳する。

＊追補

頭書のエドム人ドエグがサウルのものに来て、「ダビデがアヒメレクの家に来た」と告げた時とは、サムエル上 22 章に記録されている故事である。サウルを逃れてイスラエルと敵対していたペリシテのガドの王アキシュの下に下ったダビデは狂った振りをして難を逃れた。一方にサウル、他方にペリシテ、この危機においてダビデはアキシュを欺く方法を採った。しかし、いつまでも人を欺いていることもできず、ダビデはガドの東アドラムの洞窟に逃れていた。そこにはダビデの親族や社会的な落伍者にされた者たち４００人が集まってきた。ダビデは身軽になるために、モアブの王に両親を託した。ダビデはユダのハレテの森（今日同定は難しい）に隠れ、サウルはエルサレムの北ベニアミンの領内ギブアにいた。サウルかダビデか？周囲の族長たちは、いまだどちらに軍配が上がるか、どちらに味方して良いか分からない情勢であった。そのような時にこそ人の真価が明らかとなる。そこに、エドム人ドエクがやってきて、ダビデがノブの祭司アヒメレクの処に居ることを密告した。サウルは家臣にアヒメレクと祭司一族を殺すことを命じたが、ベミヤミンの族長たち、サウルの家臣団は、それに従うことを拒絶したので、外国人ドエクが祭司一族 85 人を殺した。ここで、「力ある者、悪事を行う者」とは、このエドクであるのか、サウルであるのかは判然としない。(たぶん、前者）この詩では敵対者が「あなた」として登場し、詩人は「わたし」であり、途中から（10 節)、神が「あなた」、神に信頼する者が「わたし」となる。この詩の背後に、何か特定の歴史的出来事を想起するより、富と結びついた権力が社会秩序を破壊し、悪だくみ、偽りが支配して、弱者を切り捨てるこの世のただ中で聞かれるべく歌われていると理解した方が良い。悪の力が支配しているように見える中でも実は慈しみの神が支配しているのである。悪の支配が永続的に感じられても、悪しき者は挫折する！自分が思い悩み、手を下す前に！